

「いのちの授業」教員ら学ぶ

臓器移植テーマに考える



道徳教育の講座「『いのちの授業』を体験的に学ぶ！」が十日、岐阜市橋本町のじゅうろくプラザで開かれ、現役の教員や教員を志す大学生ら約三十人が授業の進め方などを学んだ。

二〇一九年に岐阜市内の男子中学生がいじめを苦に自殺したことを受け、じゅうろくプラザを指定管理する「T・H・Bフアシリティズ」が昨年に続き企画。岐阜聖徳学園大の教授ら四人が講師を務めた。

岐阜で道徳教育講座

模擬授業で山田准教授の質問に答える参加者ら。岐阜市橋本町のじゅうろくプラザで

山田准教授は、一〇年に膀胱と腎臓の同時移植を受けた愛知県一宮市の加藤みゆきさん（五〇）をゲストに招いて模擬授業。加藤さんは「移植した時は幸せじゃなかった」と振り返ると、山田准教授は参加者にその理由を質問した。

参加者の発表後、加藤さんが当時の心境を告白。「誰かの不幸の上に、自分の元気が成り立っていると思うと申し訳なくて」。一方、ドナーの慰霊祭で別のドナーの家族から「もらってくれてありがとう」などと声を掛けられ、立ち直るきっかけになったと紹介した。

山田准教授は「子どもたちに考えさせてからゲストに話してもらったことが大切」と狙いを説明。参加した愛知教育大（愛知県刈谷市）二年の長縄莉歩さん（二七）は「子どもたちの学びにつながる授業をつくりたいという思いが強くなった」と語った。

（稲垣達成）